アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第15号　2017年3月　181～193頁

日英救世軍の初期幻燈上映における「場」の影響
―― 娯楽と社会教化の狭間で ――

山 本 美 紀

Ⅰ．はじめに；本稿の目的と背景

昨年来の音楽幻燈隊に関係する研究で、ブース記念病院に隣接する杉並小隊の一角を占める山室軍平記念救世軍資料館で調査をする機会が増えた。資料館では現在、様々な資料が集められ、作業が進められているという状態である。それらの資料からは、当然ながら、日本宣教の開始以来の英国救世軍（万国救世軍本部）との緊密な関係性がうかがえるものがたくさんあった。しかしながら、万国本営でどれほどの日本救世軍に関する資料があるのかという点においては、山室軍平記念資料館で完全に把握できているわけではなく、また資料館同士の所蔵内容に関する連携関係も完全ではなかった。そこで、日本救世軍からの紹介を得、2015年の夏、ロンドンにある救世軍国際記念館（歴史資料館International Heritage Center／The Salvation Army）の日本関係資料について、幻燈資料を中心に調査する機会を得た。折しも救世軍創設150周年の記念の年でもあり、ちょうど資料もよくまとまった好機でもあった。

写真 1

BRIGADIER AND MRS. WRI-GHT. OURFIRST JAPANESE LEADERS.' "All the World" 1895 年 7 月号

前回の研究論文 [1] で救世軍における初期幻燈の用い方について、日英の比較を行ったが、本稿では、救世軍による初期上映の場所に注目し、整理したいと思う。

Ⅱ．救世軍国際資料館（ロンドン）International Heritage center 初期日本宣教関連の資料について

日本関連の資料については、（調査時はシステムの不具合で当時は使えなかったものの）目録がインターネットで開示されている。まず興味を惹かれるのは、

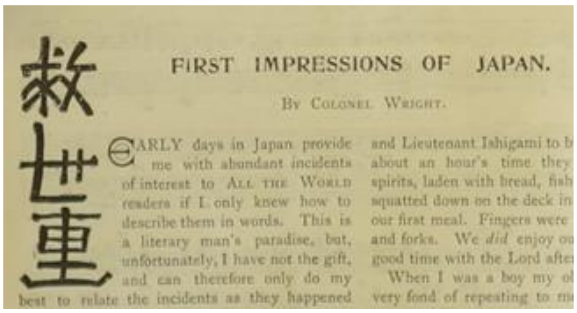
救世軍が日本で活動を始めたごく初期に、日本がどのように紹介されていたかであろう。これには、エドワード・ライト大佐（Edward Wright 1861-1947，在日本1895-99）による「日本の第一印象」（『All the World』[2] 1895年12月）が該当するが、何といっても印象的なのが「最初の日本宣教のリーダー Wright 大佐夫妻　BRIGADIER AND MRS.WRIGHT. OUR FIRST JAPANESE LEADERS」と銘打たれた着物姿の宣教使夫妻の写真 ＜写真１＞ である。この人物は、日本宣教の開始（1895；M28年9月横浜）メンバー12人のうちの2人であり、翌年最初の賛美歌集である『救世軍軍歌』＜資料1　1896；M29年＞ を出した人物である。彼との出会いを山室は後に、

> 司令官ライト大佐は非常に気さくな性質で、少しも小さな事に拘泥しない人であったから、その時もひとりでビスケットをかじりながら、 - 中略 - その態度がいかにも高慢であるようにわたくしには感じられて、はなはだ不愉快に思った。（山室1929，112）

資料 1
エドワード・ライト『救世軍軍歌』集（1896；M29 年）
山室軍平記念救世軍資料館蔵

と言い、

> 何しろ、外国士官たちが日本に同化したいつもりからとはいえ、ぶかっこうな日本服を着て、日本のげたをはいてそこらを歩き、家の中では不体裁な坐りかたをした上に、足が痛くなると人前もはばからず長長とそれを伸ばすなど、だらしのないことおびただしく、外観はいかにも奇妙不思議なもの ー以下略ー（同前 112-113）



資料 2
Colonel Wright 'First Impressions of Japan', "All The World" December 1895.

と散々ではあったが、よき協力者となっていたようである。

写真館で撮ったものであるのは明らかだが、着物の帯隠しと思われる扇など、おそらく、外国人に人気の構図がこういうものだったのだろう。「日本の第一印象 First Impressions of Japan, by Colonel Wright」は、 彼が書いた宣教レポート第1弾である（Wright 1895.）。ここ

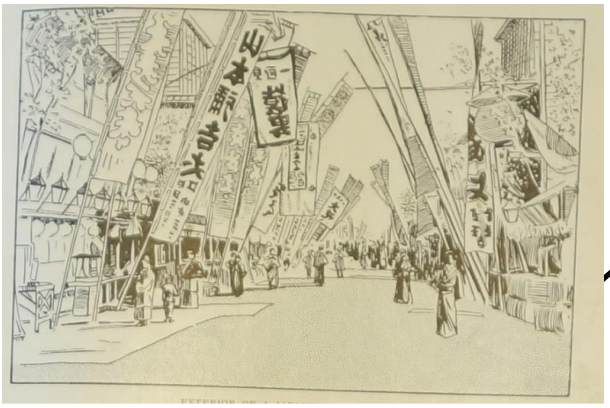
の「救世軍」の文字は、ライト大佐本人のものだろう ＜資料2＞。「軍」の文字がひっくり返ってしまっているが、ここにも日本に溶け込もうとしている努力が垣間見える。記事には、横浜に到着したところからの様子や関係者などが描かれている。

時代が下がって All The World 1902年11月号（November 1895, pp. 583-585）には、『平民之福音』（1899；M32年10月19日発刊）の初版の報告が掲載されている。初版から約1年後の報告であるが、それは1年間の本の成果を見極めた上での報告ということがあると考えられる。記事には、救世軍の信仰が自然に芽吹いたものであり、新しい宣教には、新しい方法論・戦略があるとし、その成果の一つとして『平民之福音』を紹介している。庶民に福音を伝えるという課題は、『ときのこゑ』の編集者山室軍平が行った試みであることも明記されている。

そのような山室軍平は、まず1900年には日本語版『ときのこゑ』の編集者として紹介され、1904年8月のAll the World　The Officer [3] には彼自身の証が掲載されている。他にも、山室が救世軍に関わるきっかけを与えた石井十次については、1900年5月の All The World 誌の Brigadier Duff（Mildred Duff ?）による「Japan」と題した記事において家族写真が掲載され、「典型的な日本の家族」として紹介されている[4]。

また、続く頁の中では「征服せん、我ら救世軍 ーヨーロッパ人と日本人の救世軍行進 We are the Army that shall conquer! A Procession of European and Japanese Salvationists」とキャプションの付いた写真　＜写真2＞　が掲載されている。ここまでの調査で、私自身は正装した楽隊の記念写真は見たことがあるが、行進中のこのようなスナップ写真は見ていないので、当時の楽隊の様子が垣間見え、興味深い資料である。その3年後、1903年の War Cry には「輝く日本の救世軍」とキャプションが打たれた楽隊のカラーイラ

写真 2 'We are the Army that shall conquer! A Procession of European and Japanese Salvationists' "All The World" 1900 年 5 月 号



資料 4 「日本の劇場外観 Exterior of a Japanese Theater」"All The World" 1895 年 12 月号

資料 3

'The Salvation Army in Sunny Japan' "The War Cry" 1903 年 4 月 25 日

ストが表紙になっている ＜資料3＞。前年の2月に日本救世軍では軍楽隊が正式に組織されており（『ときのこゑ』明治35年2月1日号）、その成果の報告から描かれたイラストだろう。行進の順番から、おそらくこの、どうやらあぜ道を行くバンド行進の写真を参考にしたものと考えられる。（建物は、「日本の劇場外観 Exterior of a Japanese Theater」“All The World” 1895年12月号を参考にしたものか；資料4）バンドがどのように変化したか、楽器や行進の様子を見るだけでも興味深い。

その中で1907年のブース来日の際のレポートは、やはり華々しい。彼はアメリカ・カナダからの帰路の途中、日本に立ち寄り、4月末から約40日間日本に滞在する[5]。これは、日露戦争の勝利による日本のヨーロッパ圏における地位の向上が背景にあるとされている。大隈重信はじめ、多くの日本の政治家がブース訪日の意味を認めており、明治天皇との謁見にも繋がったのだろう。

他にもいろいろあるが、このような日本に関する情報を、山室軍平をはじめとした日本の側の救世軍関係者のそれとつきあわせることは、近代以降の日本におけるキリスト教の大衆伝道を考える際に、両者のアプローチの方法や、スタンスの取り方の違いなど、少なからず意味があると考えている。

Ⅲ．幻燈上映の場の日英比較より見えること

今回の調査では、救世軍の幻燈についてまとめた非常に参考となる冊子が最近出版されていたことを現地で知った。トニー・フレッチャー『救世軍とシネマトグラフ 1897-1929：英国とインドにおける信仰の壁掛け Tony Fletcher “The Salvation Army and the Cinematograph 1897-1929; A Religious Tapestry in Britain and India”』である。ここからは、先行研究として、彼の労作より、救世軍の幻燈が初期にどういう形で導入・利用されたのか概観できる。

ｉ．英国救世軍の場合

ロンドンの救世軍において幻燈が公式に投入されるようになったのは、1891年のことである。その年、ウィリアム・ブース（William Booth 1829-1912）の息子ハーバート（Herbert Booth 1862-1926）」によって幻燈用のディスプレイがクリスタル・パレスに設置された。その後1892年4月に、ロンドンの南東部のカンバーウェル Camberwell で行われた幻燈上演で、2000人の観衆が集まったにもかかわらず、救世軍上層部は幻燈の投入を当初は渋っていた[6]という（Fletcher 2015, 8）。しかし、後になってその方針は変わり、彼らの集会「愛の集会のバンドBand of love Meetings」に接続して幻燈を使用するため、規則を改めた（同

前）。

単なる子供向けのお楽しみや、大衆娯楽のようにならないよう、使用に際して常に注意を怠らないといった、幻燈へのこのような警戒心は後々まで続く（同前，9）。そのため、救世軍の幻燈の使用は、救世軍本部によって認可されなければならなかった。効果的なことが明白な視覚メディアの使用に、これほどの注意がなされる背景には、大人数収容可能な上映場所の影響が考えられる。というのも、「幻燈」は、当時として決して目新しいものであったわけではない[7]からだ。「私たちは無意識のうちに、新しいメディアは古いメディアが果たした役割をカバーし凌駕したからこそ繁栄したと思いがちだ。 - 中略 -〔しかし〕ある技術が成功する会中は社会的・文化的な要素に左右され、 - 中略 - 技術自体が優れていても、それが文化的なコンテクストに適合しなければ定着は難しい」（草原2015，7）ということが、この場合もあてはまると考えられるのである。言い換えれば「幻燈」は、すでに手垢のついたメディアであり、集まってくる聴衆やその場所にある程度の前提があったと考えられるのである。

英国救世軍の第1回幻燈上映の場となったクリスタル・パレスは、1851年にもたれた「万国産業製品大博覧会」通称「万博」の会場となった建物である。全長560メートル、幅120メートル、高さ30メートル、建築面積7万平方キロメートル、「当時の科学技術の粋を集めて建設された鉄枠総ガラス張り」の巨大なパビリオンは、ハイドパークに建設された（長島1987，196）。

イギリスが絶頂期を迎え、何度かの不況は経験しても庶民の生活レベルも向上していた中、「展覧会中の展覧会、贅沢きわまりない見世物、『理に叶った娯楽』という高邁なる理念の極致」である（オールティック1990，259）。この場合の「理に叶った」というのは、いわゆる展示を通して「市民を教育していく」という意味での理屈である。1840年代、地方では「ポリテクニック（職工学校）の流儀に倣った擬似娯楽的な色彩」を持った見世物（展示企画）が流行し、そこで潜水艦やパノラマなどが展示されていたという（同前，258）。それらを成人教育運動の機関誌が報道し、ロンドンで「実用的技芸」などの展示企画など成人教育施設を運営していた「芸術協会」が注目して、まずは「イギリスの製品および装飾美術の精選見本」の展示会（1847年3月）[8] を開催する。これが、ロンドン万博への布石となった。

そのような前提だったので、クリスタル・パレスはそれ自体がイギリスの技術の粋を見せつけるものであり、ロンドンに住む者には「理に叶う」ところの教育的娯楽であった。実際、このロンドン万博の終盤には当時のロンドンの総人口の約2倍に相当する実質400万以上もの国民が訪れ、「この万国大博覧会ほど、広汎に、いっ時であれ社会的差別が無視されたこと」（同前，262）[9] はなく、階級が混じり合う体験を相互にさせ、大衆社会の到来を告げるものとされている。

万博閉会後、クリスタル・パレスは解体され、ハイドパークからロンドン郊外のシデナムに、今度は植物園やコンサートホールなども併設して移設される（1854年）。先述した万博を準備した「芸術協会」は、2度目の「イギリスの製品および装飾美術の精選見本」の際に、電気照明の技術のデモンストレーションとしてプロムナード・コンサートを行っており（1848年3月-4月）、展示以外の内容を伴うことによる動員数の増加を確認済みであった（同前，259）。さらに万博後には、1852年にはロンドンのテムズ川沿いにミュージック・ホール「カンタベリ」が開店している（井野瀬1990，15-24）。1830年代以来のアマチュア音楽の隆盛と、パノラマや万博など「展示を見る」という経験を通して、一つの建物内で様々なものを音楽付きで見たり、聞いたりするスタイルは、娯楽において自然に求められるようになっていったと考えられる。実際、そのような、庶民の娯楽に耐えうる施設として、拡大されたクリスタル・パレスはシデナムに再建された。

救世軍が使用した時のクリスタル・パレスは、この移転された後のものである。「理に叶う」ところの教育的娯楽の提供を目的とした成人教育の施設として出発した万博と、そのパビリオンのクリスタル・パレスではあっても、すでに相当な年月を、コンサートホールも併設した大人数収容可能な総合娯楽施設として存在していた。一方で、手軽な娯楽施設としてのミュージック・ホールもあり、庶民の日常において「教育施設」と「娯楽施設」の在り方が、当時かなり接近・近接していた状況が考えられる。

ⅱ．日本救世軍の場合

では、日本での幻燈上映の場は、どのような場であったのだろうか。

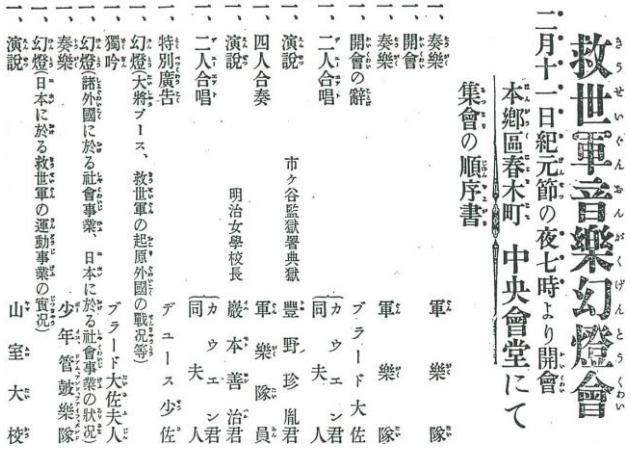
日本の救世軍の音楽幻燈隊の初陣は、1902（M35）年2月11日、横須賀であった。同年2月1日付けの救世軍新聞『ときのこゑ』第147号2面には、「軍楽隊の編制」と題した記事が載っている。

> この度救世軍に於て軍楽隊が編成せられ、幻燈を携へて東海道筋より中国、四国に推出す －中略－ 我が軍中に軍楽の進歩を見る一階段として之を喜ぶ者である升。[10]

続いて同じ新聞の3面には、以下のようにある。

> 新たに倫敦から着したる幻燈の絵を見るに、大将ブース以下、救世軍の名将方の写真、様々の社会事業、貧民町事業の光景等、注意すべきもの多く、取分け有名なる出獄人スロツス爺の続き物の如きは、感動すべきものであり升。之に日本の救世軍各方面の写真等を加へて、立派な幻燈図画が調ひました。

上記の記事を読む限り、ロンドンの救世軍万国本営から新しい幻燈が届き、すぐに音楽幻燈隊が結成されたということがわかる。つまり、救世軍での音楽隊の結成と幻燈は、ほぼ同時に立ち上がったのである。ちなみに、この時点での日本救世軍の幻燈のスライド数は130枚ほどであり、ガスによる光源の投影であった[11]。


救世軍音樂幻燈會
二月十一日紀元節の夜七時より開會
本郷區春木町 中央會堂にて
集會の順序書
一、奏樂　軍樂隊
一、開會
一、奏樂　軍樂隊
一、開會の辭　ブラード大佐
一、二人合唱　同カウエン夫人君
一、演說　市ヶ谷監獄署典獄　豐野珍胤君
一、四人合奏　軍樂隊員
一、演說　明治女學校長　巖本善治君
一、二人合唱　同カウエン夫人君　デユース少佐
一、特別廣告
一、幻燈（大將ブース、救世軍の起原外國の戰況等）　ブラード大佐夫人
一、獨吟
一、幻燈（諸外國に於る社會事業、日本に於る社會事業の狀況）　少年管弦樂隊
一、奏樂
一、幻燈（日本に於る救世軍の運動事業の實況）　山室大校
一、演說

資料 5　1903 年 2 月 1 日『ときのこゑ』171 号年 4 面

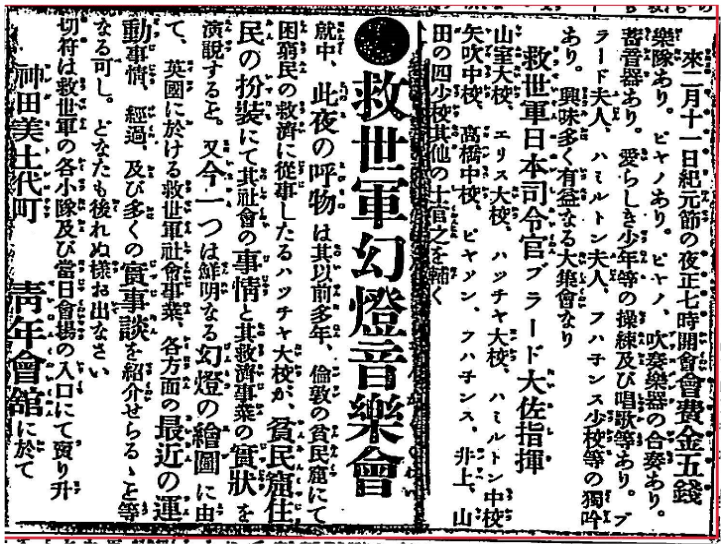
一方、日本救世軍のプログラム構成は、約1年後の1903年2月1日『ときのこゑ』171号年4面に掲載された広告＜資料5＞から確認できる。このプログラム構成によると、幻燈の前にまず「奏楽」や「二人合唱」「四人合奏」（軍楽隊）「独吟」（おそらく、ブラード大佐夫人の独唱か詩の朗誦）といった、音楽に関する項目が並んでいる。軍楽隊の結成にあたっては、「私し共は各救世軍人が尤と音楽に重きを置くことを望む、各小隊に尤と軍楽が盛んになることを願ふ」[12] と音楽技術の向上が推奨され、さらに「ロブソン少校を隊長とする軍楽隊の練習は漸く進み、今早や何所へ出しても恥ずかしくない腕前を鍛え上げました。」[13] と言及されるなど、音楽的内容の充実が、幻燈集会にとって重要な側面を担うものとして、初期から常に意識されていた[14]。

会場となったのは、大人数を収容可能な会館や、地方においては劇場（芝居小屋）であった。事実翌月1902（M35）年3月15日付け『ときのこゑ』「横浜に於る幻燈音楽会」には、以下のようにある。

> 横浜にては其前後凡そ七八種の音楽会、慈善幻燈会の催あり、現に我軍の幻燈音楽会の前夜はしかも同じ劇場にて吉原の芸妓のブラス、バンドなどさへありたると云へば時機は決して最好の時機に非ざりしは明白のとなれども、我ら同人の非常なる奔走と同情者諸氏のひとかたならぬ助力 [15]

とあり、当時はすでに「幻燈集会」といっても、すでにそれほど珍しいものではなかったこと、また救世軍の幻燈集会の会場が「芸妓のブラスバンド」まで扱うような劇場であったことがわかるのである。さらに上の記事からは、集会場付近で盛んに様々な音楽イベントが開催されており、集会の度に各地の救世軍メンバーが動員に奔走していたことがうかがえる。

同じ新聞には、始まって1ヶ月もしない間に、幻燈の数が増えていることが記載されている[16]。幻燈はじめこの種の「見世物」的要素の強いものの中では、むしろ「後発」であった救世軍の幻燈伝道には、勢いを得るためにも、海外のニュース映像とも受け止め得る新しい幻燈フィルムの追加が必要であったのだろう。


來二月十一日紀元節の夜正七時開會會費金五錢
樂隊あり。ピヤノあり。ピヤノ、吹奏樂器の合奏あり。
蓄音器あり。愛らしき少年等の操練及び唱歌等あり。ブラード夫人、ハミルトン夫人、フハチンス少校等の獨吟あり。興味多く有益なる大集會なり
救世軍日本司令官ブラード大佐指揮
山室大校、エリス大校、ハッチヤ大校、ハミルトン中校、矢吹中校、高橋中校、ピヤソン、フハチンス、井上、山田の四少校其他の士官之を輔く
●救世軍幻燈音樂會
就中、此夜の呼物は其以前多年、倫敦の貧民窟にて困窮民の救濟に從事したるハッチヤ大校が、貧民窟住民の扮裝にて其社會の事情と其救濟事業の實狀を演說すると、又今一つは鮮明なる幻燈の繪圖に由て、英國に於ける救世軍社會事業、各方面の最近の運動事情、經過、及び多くの實事談を紹介せらるゝ等なる可し。どなたも後れぬ樣ね出なさい
切符は救世軍の各小隊及び當日會場の入口にて賣り升
神田美土代町　青年會館に於て

資料6　1904(M37)年2月1日付け『ときのこゑ』第195号4面

会場として中心となったのは東京では「神田の青年会館」と呼ばれた青年会館（神田・YMCA）[17]、和強楽堂（神田）、中央会堂（本郷）、横浜ではパブリック・ホール（山の手）というのもあるが、先の引用での会場は「羽衣座」[18]（羽衣町）である。羽衣座は、歌舞伎などもかかる横浜でも伝統ある大きな劇場であった。それらの劇場の広告を見ると、チケットや会費があり、物によっては各小隊（教会）で販売している＜資料6＞。幻燈や音楽といった内容もさることながら、料金を支払って入るあたり、参加者側にとっては、ますますその他の見世物興行との境界はあやふやであったことだろう。

幻燈を用いた伝道活動と娯楽との境目について、1897 年頃から日本で幻燈伝道を行っていたオルチンも言及している。遅れて入ってきてもう一度幻燈を上演してほしいと願う者に、彼は「丁寧にお断りした」としている（Allchin 1900, 300）。そして、「最も愚かなのは、単に映写会としてこの機会を浪費することである」とし、「彼らの多くは、説教のためではなく、絵（幻燈）のために集まっています。しかし、後には彼らの心に「小さな細い声」が響いていなくてはなりません。」と自分のスタンスを説明している（Ibid.）。

救世軍の場合、音楽幻燈隊を始めた明治30年代は、商品などの宣伝目標で町中を練り歩く宣伝楽隊、いわゆるジンタが流行した時代であった。宣伝楽隊の宣伝は、見世物小屋の人寄せにも使われ、大阪では鐘や太鼓を用いた街頭宣伝が流行っていたという。まさに、救世軍がやっていた方法は、それに沿うものであり、確かに本場英国に倣った方法であったとしても、道で出会った人々には他の見世物と明確に区別するのは難しかっただろう。むしろ、当時の他の幻燈の用いられ方と同様、一つのエンターテイメントとして成立していたと考えられる。まして内容は、江戸時代から続く「写し絵」や「幻燈」であり、すでにオルチンが嘆いていたように[19]、子供の夜のお楽しみ程度のものであった。明治以降の幻燈は、はるかに

教育的内容を含むものが多くなっていたにせよ、それさえも救世軍の幻燈への関心に際しては、ちょっと変わった外国のありがたい話が聞ける娯楽として、受け止められる傾向が多分にあったのではないだろうか（湯本2005，86）。

日英の比較としてわかるのは、幻燈集会を行うにあたって両救世軍が場としたのは、既存の施設であり、必ずしもそれが教会に由来するものばかりではなかったこと、また、幻燈そのものがもつ娯楽的要素と観客層から、娯楽と伝道／教育が近接し、ともすれば他の数ある娯楽の一つとして同等に受け止められる恐れがあったということである。

そう考えるならば、イギリスで幻燈を集会に用いることへの警戒も理解でき、日本における救世軍伝道も、ほぼ同様の状況であったと考えられるのである。

Ⅳ．おわりに

英国救世軍が活動を開始した 1865 年頃のイースト・エンド地区は、創立者ウィリアム・ブースが著書『最暗黒の英国とその出路 In Darkest England and the Way Out 』（1890）で描く「最暗黒」の部分が日常である地域であった。ロンドンでは 1825 年からほぼ 10 年ごとに恐慌があり（36 年、47 年、57 年、66 年）、1870 年代には回復不能な構造的な不況が定着するようになっていた。先にあげたクリスタル・パレスの万博は、英国の誇る技術の粋を集めたとはいえ、慢性的不況が一時落ち着いていたに過ぎない時期である。まさに、その万博開催の 1851 年から、大々的な社会調査に基づく 3 つの研究が続けて発表された。まず、1851 年～1852 年のH. メイヒュー『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（全４巻 1861－62 年）、2 つめが 1889 年～1891 年と 1902 年～1903 年のチャールズ・ブース（Charles Booth 1840-1916）による『ロンドン市民の生活と労働』（初版、全 2 巻 1889-91。第 3 版、全 17 巻、1902-03 年）、3 つめは 1901 年のＳ. ラウトリーによる地方都市研究『貧困－都市生活の一研究』である。その中でも重要なのは、ブースが「ロンドン調査」（1886-1902）によって「貧困線」を引いたことである。彼は 1 週間あたりの収入額 21 シリングと 22 シリングの間にこの「貧困線」をひき、普通の生活を営めない世帯を割り出した。その結果、貧困線以下の世帯が全体の 3 割に達すること、つまり「一九世紀末までのイギリス社会が、せいぜいのところ七割の大衆社会でしかなかった」（長島 1989，122）ことを明らかにした。

しかしそれでも、万博を契機として大衆のレジャーへの関心は高まっていく。それには識字率の上昇が背景にあると考えられる。1840 年代に 66％とされた識字率は民間の教育が徐々に浸透することで、1850 年に 69％、1860 年 74％、1870 年 80％と進み、初等教育法（Elementary Education Act 1870）によって 1900 年には 97％に達する（長島 1989，118）。

そのような識字能力の大衆化と、1855 年のスタンプ税[20] 廃止による定期購読料の引き下げを背景に、様々な印刷メディアが発刊されていく。その一つが救世軍の“The War Cry”であると考えられる。必ずしも階級に限ることはなく、文字が読めれば、彼らは新聞等を通じて、自分とは違う生き方や生活を垣間見る機会を得たのである。また、それら一連の貧困調査は、ロンドンが「半世紀以上の間に、無視するにはあまりに多すぎる貧困層を、社会の根底に沈殿するままに放置しつづけ」（長島 1989，121）、その結果、コレラの大流行（最後の大流行は 1866 年）やロンドンの大臭気（Great Stink 1858 年）をはじめ、実際に深刻な事態を社会に引き起こすことになったのを示した。そしてこれらの状況が救世軍を生み出し、その社会活動は一宗教活動を超えて急速に発展していったのである。それは見方を変えるならば、メディアの共有が進むことによってリアルタイムのニュースが娯楽と重なる新しい状況でもあろう。もっとも、ニュースが深刻かつ身近で、自分たちの生活にも影響する可能性が高いほど、関心が高まりやがて娯楽性を帯びてくるのは伝説や説話の時代から変わらないことでもある。

日本における山室軍平『平民之福音』もまた、聖書にある福音書をそのまま翻訳したような内容ではなく、山室が日常接する人々にも分かるように、聖書のスピリットを解釈し、「物語」に練り上げたものである。というのも、山室が周囲の人々を当時通っていた教会に誘っても「終日はげしい労働をした上に、だれがわざわざあんな肩のこるような話など、聞きに出かける物好きがあるか」と言われ、人々が手にしたキリスト教のトラクトも「読んでも分からない」と捨てられてしまっていたからである。彼自身も「講壇の言葉も、話も、また一切の態度も、大分一般民衆とかけ離れたところがあるよう」に思い、「キリスト教の講壇と一般民衆との間に、渡ることのできない隔たりがあるのではないか」と感じていた。そこで、「どんな無学な人でも、聞いてわかるように福音を伝え」「どんな無知な人でも、読んでわかるように真理を書き記す」ために、「昔の心学本、道話本、その他詩だの、歌だの、俳句だの、ことわざだの、たとえ話だの」を集めてそれを伝道に取り入れていったのである（山室 1929，35-37）。

つまり、初期救世軍における山室軍平による伝道は、むしろ民衆の間に既存の娯楽要素とそこに息づく教育的内容を利用しながら、「渡ることのできない隔たり」を埋めようとしていたということなのである。「娯楽」と「教育的」あるいは「教義的」内容とのバランスは、その後も日本の伝道において大きな課題であり続けたと考えられる。

多くの人を集め、ショーのように音楽を奏で、幻燈でニュース映像のように講釈付で次々と写す救世軍の方法は、参加する人々にとっては、楽しい見世物の様相もあっただろう。しかし、オルチンの「私が行くのは、何よりもキリストの真実に彼らの良心を開かせるためです。ですから、彼らの耳に福音が鳴り響いた状態で彼らを去らせなくてはなりません。すべ

てのことが、まじめな感情を定着させるために企画されているのです。」（Allchin 1900, 300）という主張は、当時の伝道方法においてはかなり縛りになっていたのではないだろうか。救世軍に先んじて音楽幻燈活動を展開していた岡山孤児院の石井十次もまた、スポンサーの英国国教会宣教師バックストンから「音楽幻燈隊運動の方針を改めて純然たる〔信仰の〕証明的事業とすべし」といった、同様の忠告を受けている。石井は孤児院の子供たちの音楽幻燈隊を結成し、その日本ツアーを行って孤児院運営の資金集めも行っていた。バックストンの忠告は、1898（M31）年の松江での岡山孤児院幻燈伝道隊の公演を観た際のものである。やはりその内容や全体的な雰囲気に違和感を覚えたと考えられる[21]。

もともとキリスト教の基盤のない日本での大衆にむけた伝道に、キリスト教の教理をそのまま伝えることは困難であったとこは想像に難くない。その時、娯楽的要素を取り入れて展開しようとするのは手段として必要だっただろう。しかし、娯楽と教養と福音伝道の間で揺らぐ状況に対しての外国人宣教師や指導的立場の者たちからの警告は、いったいどの視点から発せられたものだったのだろうか。その警告を受け入れた結果、キリスト教伝道は、教義・教理的な内容を固持するあまり、必要以上にそれにしばられる傾向があったのではないか。

実は現代の讃美歌にまつわる、その表象も含めた様々な課題にも、根底には同種の課題、つまり娯楽的要素と教理・教義的内容、それをもって現代社会に向き合い、それらを言葉にのせる課題が横たわっている。一方で、日本の讃美歌は聖書との結びつきが弱いという評価もある。それは、学校教育の場で最初から「唱歌」を通して讃美歌のスタイルが導入されながらも、教会で教えられる聖書の内容が、庶民には実際には伝わりにくかったということを示しているのかもしれない。幻燈音楽会が持たれた会場と内容を、当時の社会状況から検討するとき、そこに現代の教会が社会との接点においてかかえる課題にも共通する問題が、解決されないまま温存されてきたことに改めて気づかされる。そうして、山室が埋めることを切望した「渡ることのできない隔たり」は、今なおそこにあることに思い当たるのである。

【引用／参考文献】

・Allchin, George, ’For Young People：Preaching With a Lantern in Japan’. The Missionary Herald of the A.B.C.F.M. 1900 July, pp.297-300

・Fletcher, Tony, “The Salvation Army and the Cinematograph 1897-1929; A Religious Tapestry in Britain and India” Local History Publications, 2015, London

・井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』朝日新聞社，1990

・『石井十次日誌』石居記念友愛社，1969

・葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動――自助努力、社会事業、宗教的救済のはざまで」『駒澤大学心理学論集』第10号所収，pp. 79-87，2008

・小池俊彦 平野亮「＜測定＞の社会学：ケトレーとブース（１）」『鶴山論叢』第10号所収，神戸大学 pp. 91-115，2010

・草原真知子「メディアテクノロジーとしての幻燈」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編，土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』pp. 24-29 青弓社，2015

・長島伸一『世紀末までの大英帝国』法政大学出版局，1987

・長島伸一『大英帝国』講談社，1989

・オールティック，R,D.,小池滋監訳『ロンドンの見世物』国書刊行会，1990

・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編，土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』青弓社，2015

・Wright, Edward, ‘First Impressions of Japan’,“All The World” December 1895, pp.386-388

・山室軍平『私の青春時代』救世軍出版及供給部，1929

・山本美紀「山室軍平『平民の福音』および、救世軍所蔵幻燈用ガラススライドにみる近代日本における人間教育と宗教――大衆とキリスト教との出会いを巡る一考察――」『人間教育学研究』第1号所収，日本人間教育学会，pp. 65-72，2015

・山本美紀「初期救世軍軍歌と日本製Tuneの登場――キリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐって――」『ウェスレー・メソジスト研究』第16号所収，pp. 81-108，2016

・山本美紀「大衆娯楽と近代社会における人間教育への一考察――救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって――」『人間教育学研究』第4号所収，日本人間教育学会，pp. 125-134，2016

・山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部，1929

・湯本豪一『絵で見る歴史シリーズ　明治ものの流行事典』柏書房，2005

---

[1] 山本美紀「大衆娯楽と近代社会における人間教育への一考察――救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって――」『人間教育学研究』第 4 号，所収【pp. 125-134】，2016 年。

[2] “All The World”は、現在も年に4回発行されている海外ミッション報告。1884年に国際宣教本部により発刊。

[3] 1893 年に発行された“The Officer”の、1900 年から 1913 年までの名前。

[4] Japan, by Brigadier Duff [May 1900, pp301-306, All The World] p.303

[5] 山室軍平『日本に於るブース大将』明治 40 年 12 月。

[6] 1892 年 4 月『士官雑誌 The Field Officer』。

[7] ヨーロッパにおいて幻燈は 17 世紀半ばには既に使用されており、改良が順次加えられて 19 世紀には旅芸人が幻燈を持って各地を経巡っていた。カバーするジャンルも、「視覚メディアとして娯楽だけでなく宗教から科学教育まであらゆる分野」にわたったという。草原真知子「メディアテクノロジーとしての幻燈」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編，土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物

誌』p25 青弓社，2015。

[8]「二一四点の陶芸、ガラス、壁紙、家具、食卓用刃物類―の展示を催し、二万人が見につめかけた‐中略‐再度（一八四八年三月－四月）展示会を催し、工場主らから七〇〇点の出品を得て、七万三〇〇〇人を超える入場者があった。一八四九年の入場者は一〇万人を超え、あるものは目新しい電気照明に照らされた二度の夜間「プロムナード・コンサート」に惹かれ、またある者にとっては、イースター週間をとおいて職人たちにサービスされた減額入場料（二ペンス）が魅力だった。(同前 259 頁)

[9] 長島によると、会期中には、「月曜日から木曜日までの入場料を一シリングという大衆料金に抑え‐中略‐一シリング券での入場者数は、延べ四四四万人」だったという。

[10]「軍楽隊の編制」『ときのこゑ』1902（M35）年 2 月 1 日、2 面。

[11]「二百五十燭光のアツセチリン瓦斯（ガス）は百三十枚の鮮明なる絵図を写して遺憾なく」(1902（M35）年 2 月 15 日付け『ときのこゑ』第 148 号 3 面)。

[12] 1902（M35）年 2 月 1 日付け『ときのこゑ』第 147 号 2 面。

[13] 1902（M35）年 2 月 15 日付け『ときのこゑ』第 148 号 3 面。

[14] 1904（M37)年 2 月 1 日付け『ときのこゑ』第 195 号 4 面＜資料 6＞には、「楽隊あり。ピヤノあり。ピヤノ、吹奏楽器の合奏あり。蓄音機あり、愛らしき少年等の操練及び唱歌等あり。ブラード夫人、ハミルトン夫人、フハモンス将校等の独吟」とあり、集会の音楽的内容がさらに充実した内容となっていることがわかる。

[15]「横浜に於る幻燈音楽会」1902（M35）年 3 月 15 日付け『ときのこゑ』第 150 号 3 面。

[16] 爾来追々調へ来りたる幻燈の絵は、漸次数を増して其神田の青年会館に於る門出の時よりは、五十枚許も新奇なる、最も興味あるものを加へたるとに候。(同前)

[17]「青年会館に於る幻燈軍楽隊の初陣」1902（M35）年 2 月 15 日付け『ときのこゑ』第 148 号 3 面。

[18]「横浜に於る幻燈音楽会」1902（M35）年 3 月 15 日付け『ときのこゑ』第 150 号 3 面。

[19]「初期の私の伝道旅行は大人の観衆を集めるのが大変でした。というのも、普通学校においては幻燈というのはほとんどが“おもちゃ”であり、子供に夜のおたのしみとして与えるものだからです。人々ははじめ、私のやる幻燈がそれとはまた違うものであるということがわかりませんでした。しかしある夜、彼らはその間違いに気付きました。それからはいつも、多くの男女が参集するようになったのです。」(Allchin 1900，297)

[20] 新聞や雑誌の発行に課せられていた知識税。廃止により、ジャーナリズムがマスメディアに転化したしたとされる。(長島 1989，24)

[21]『石井十次日誌』石居記念友愛社，1969 年，211，220 頁。二千人にも及ぶ公演では、観に来た客同士の喧嘩などもあったという。

（やまもと・みき　奈良学園大学人間教育学部教授）